『國民新報』1940年1月14日

[主張]　小學校の先生方へ

　はいのとのをのにいてこのをする。このはれも二十二三ののである。そしてで、それぞれがんでるであり、このとふのにぶつかつて、非にきなにつたのだ。であるはかのでしたはなかつた。よしやがあつたにしても、それはのさで、つてのけることもるけれども、いざをつになるとさう[は]かない。のからればいになひはさせたくない、れる達にもははせたくない。々ののことなどもはれる。

　そこであなたはのをへることゝなる。一にしてへばもつとのるがしくなるのだ。そしてくはをしてまでへかうとするのである。をればもつといがへてやにをさせずにむだらうとふのだ。これは一づけることであつてににへない。のやうなのではにのなことである。

　さて、にいて一げ[た]いのだ。それは、あなたはをどうてるか、そしてのとふをなんとてるかとふことである。

　がづくでめられるものならば、にしきものはないであらう。かのりなきしき達はれも一ををうてしたものなのだ。にがづくで、してられるものであるにしても、がしてととをすなものであらうか。にはしくてなものよりも、めるがになものがいとふをはつきりとしなければならない。

　のはへられたるつとめにをめていそしむことだ。をすはしてゑることはない。ののためにをちんでるに、して、してにするなことはないのだ。それは、このはのしふであり、このはのしろしめすであるからである。をじ、にりまつツて、へられたるのために一をげる――をしてももちむものならば、ず、のほまれもあることであらう。ましてやこそは、のあらゆるのでもななるにいてをやである。

　であるから、！どうしよう、やをにしやうなどゝひつてはならない、なな、にすればわがをくかう、このをばのにはしくしげやうとふことばかりにせよ。をひ、をよう、のことをにしやうか、たるはに、などふことはてにしまつれ。一つのにをげるものは、ずやのになることをぜよ。